献 呈 の こ と ば

学長　谷　岡　一　郎

今年度退職されるのは、専任採用の古い順に木村雅文教授、小磯かをる教授、大石史博教授の３名です。それぞれの分野で、大学の教育と研究に（そして良いムード作りにも）多大な貢献をいただいた先生方です。大阪商業大学論集の本号は、これらの先生方の退職記念号であり、３名の先生方並びに関係者各位に対し、ここに謹んでお礼を申し上げます。

木村雅文先生は、私と同じ分野の社会学が専門で、特にタルコット・パーソンズの研究に力を入れておられました。タルコット・パーソンズ博士は、社会学におけるアメリカの代表格（泰斗）で、社会構造を機能的に分かりやすく分析する枠組みを提示したことで有名です。木村先生はこの分析枠組を活用し、日本社会のいくつかの側面の分析に応用しておられますが、いずれも読みごたえのある優れた論考でした。この分析マインドが根底にあったことが幸いしたのでしょうか、JGSS 計画がスタートした時にも、積極的に協力してくださいました。本来ならお願いできないようなレベルの作業まで、イヤな顔ひとつ見せず、常に協力を申し出てくださったこと、この場を借りて御礼申し上げます。ご自身も、日本の宗教観などにつき JGSS データを分析し、出版・発表されておられます。

JGSS 計画がスタートしたのは1998年で、すでに20年以上がすぎました。外部や当局からの評価も上々（ずっとＳ評価）ですが、今年度はさらに、パワーアップしようという勢いです。この背景には、木村先生に加え平成６（1994）年に当大学に来られた、小磯かをる先生の貢献も少なくありませんでした。小磯先生は南オレゴン州立大学院で学ばれていますが、言語教育に造詣の深い方で、当大学の英語教育の向上に貴重なご示唆をいただきました。そこにいるだけで周囲を明るくするタイプの先生で、ムードメイカーとしての役割も忘れられないものです。昨年私が主催しました EBU（アーリーバード・ユニバーシティ）にも、朝早くから何回か参加してくださいました。改めて御礼を申し上げます。

大石史博先生は心理学のご専門で、特に教育関連のエキスパートとしてご活躍いただきました。教職課程でも大変な努力をいただきましたこと、加えて感謝申し上げます。先生は温厚な性格で、学生に向き合うその姿が、常に若手教員らからお手本となる先生として慕われておられました。古寺散策や山歩きがご趣味と伺っておりますが、なんとなく先生らしく、さもありなんと感じる次第です。

研究者・教育者の利点のひとつは、「終わりがない」という点でしょう。特に学ぶことは永遠に続く楽しみとして、これからの時間的余裕は、さらなるステップアップに繋がることすら起こる世界でもあります。それほどの間を置くことなく、新しい研究などの報告が来ることを期待しておりますし、実際そうなることでしょう。ひとまず区切りとしてのご退職ではありますが、これからもご尊顔を拝する機会がたびたびあると信じています。まずはお体を大切にご自愛ください。これまで有難うございました。